

# 日本庭園史から出雲流庭園を見る

服部博子

## 1. はじめに

庭園文化研究分科会では、今年度は2回の視察会を通し8つの庭園を視察した。1回目は、斐川平野に立地し築地松に囲まれた書院造の建築と一対となった平庭（4か所）を視察した。2回目は、松江市、安来市の庭園を訪れ、斐川平野の庭との違いを視察した。

この視察を通じ、斐川平野を中心に同じ形式の庭園が発達し残されていることを知ることができた。また、今回の視察会は、庭師とともに歩き、日本庭園の奥深さ、形式や見方を知る貴重な機会となった。そこで、本レポートでは、次の2つの視点から出雲流庭園について考察を試みた。

- 庭園の立地と出雲流技法の度合い
- 日本庭園史から出雲流庭園を見る

～出雲流のキーワード「枯山水」「茶庭（露地）」より

## 2. 庭園の立地と出雲流技法の度合い（今年度視察庭園）

今年度視察した庭園8か所について、『出雲流庭園「歴史と造形」』において出雲流の特徴と言われている技法（表1）について検証を行った。

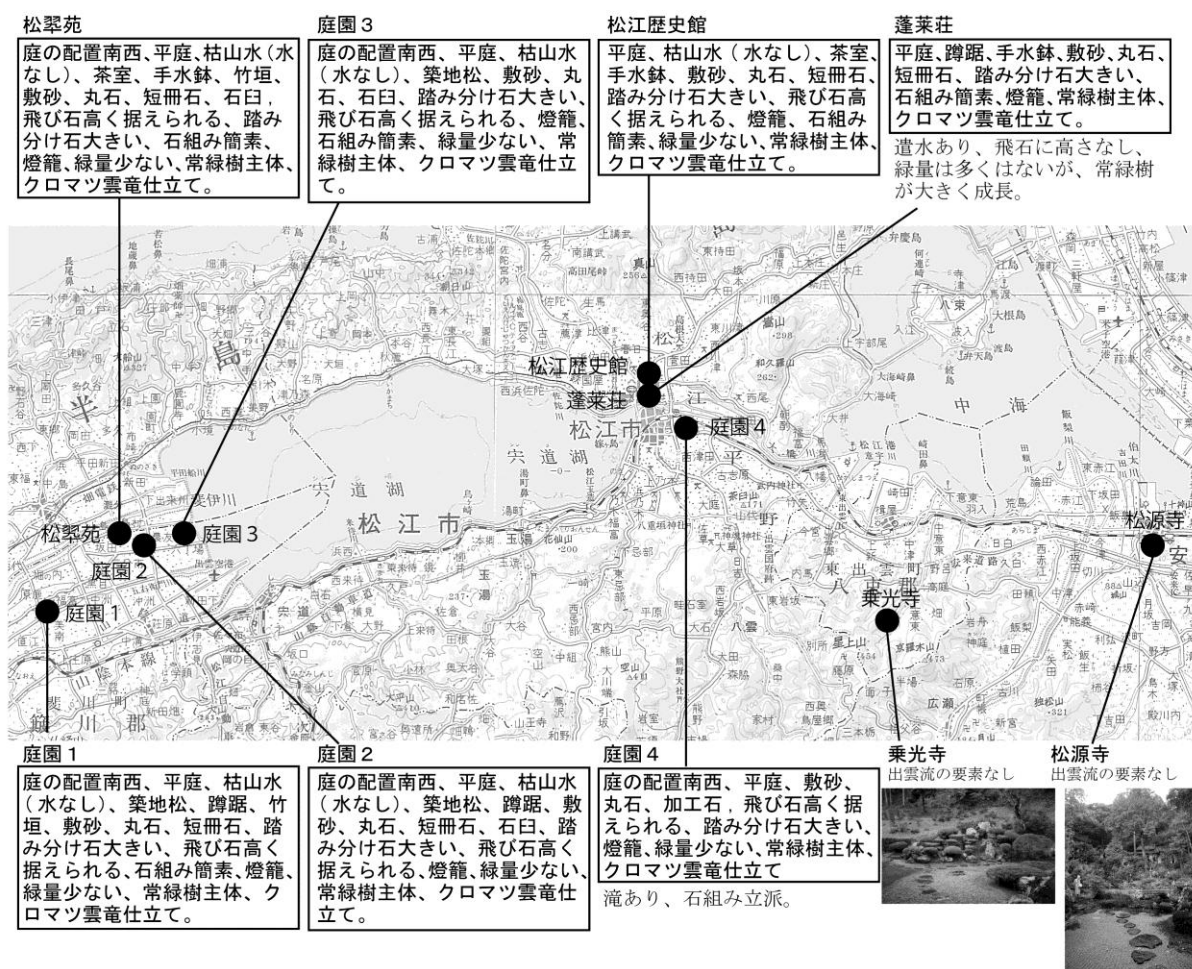


図1 庭園の立地と出雲流技法の度合い

表 1 出雲流庭園の特徴

庭の配置：建物の南西部・アプローチ等
基本的な構造：平庭・枯山水（水の有無）・L字型・庭の境界（築地松）
茶道の要素：茶室・蹲踞・手水鉢・竹垣の有無
飛び石の特徴：敷砂・高さ・丸石小・短冊石・石臼・踏分石大・靴脱ぎ石
石組み・燈籠：簡素な石組み・T字型石組・来待石燈籠・兜型等
庭木の特徴：緑量少・常緑樹主体・クロマツ（雲竜仕立て）等

結果、図 1 に示す通り、斐川平野に立地する 4 か所の庭園については、多くの出雲流庭園の特徴を備えていると言えた。そして、東に行くに従い、その特徴は薄らいでいると言えた。

今回視察した庭園は、江戸後期から明治、大正に作庭されたものもあったが、昭和後期以降に作庭及び手入れされた庭も半数に及ぶ（庭園 2、庭園 3、松江歴史館庭園、庭園 4、松源寺庭園）。事例が少ない中ではあるが、出雲独自の庭園文化は、斐川平野を中心に現在においても、庭園を造る際にはその技法が継承されていることがわかった。

### 3. 日本庭園史から出雲流庭園を見る～出雲流のキーワード「枯山水」「茶庭（露地）」より

日本庭園の変遷について『日本庭園の見方』（斎藤忠一監修 JTB）を参考に概略を表 2 に整理した。日本庭園史上、水が全くない「枯山水」が誕生したのは、室町時代中期である。厳しい禅の思想の影響を受け、禅寺の中庭を中心に枯山水式庭園が造られるようになった。その発展の理由は次の 4 つが考えられる。

- ① 禅宗寺院において宗教儀式が外の空間から建築内部へと移り、無用となった広場に、石を据えて宗教的な意味をもたせた何かを表現するという作庭法が始まったため。
- ② 敷地の問題で、広大な池泉庭が不可能であった。
- ③ この時代に流入した北宋画の影響で、水墨山水画の世界を三次元に表現するのに枯山水が最適であった。
- ④ 経済的な理由。池泉庭より安価で済む。

日本庭園史上、枯山水様式の誕生の影響は大きく、自然再生的な庭園から、抽象的な風景の造型へと日本庭園を大きく変化させ、庭園の表現の幅を広げることとなった。

改めて、斐川平野に枯山水が発展した理由を上記に倣って考えてみたい。①出雲流庭園は、大地主など個人所有の庭園を中心に発達している。そのため、禅の影響というのは当てはまりそうにない。②敷地の問題は、可能性としてはあり得る。江戸時代末期、全国的に藩と商人の交流は極めて多くなり、松江藩でも茶道を媒介として文化交流が行われていたと考えられる。庄屋、地主、商人等の家には藩主が度々通っていたと考えられ、そのためのアプローチとして庭が利用されていた。そのため、出雲流庭園には飛び石が欠かせない存在となり、結果、庭に池泉を設けるスペースが無かったと考えることはできる。③水墨山水画の影響はなんとも言えないが、自然を縮景するのではなく、風景を造形化しようとする現代的な感覚を当時庭づくりに関わった人々が持ち合わせていたことは間違いない。④経済的な理由は、作庭当初はそれほど問題なかったかもしれないが、庭を維持していく上で、手が入れられていった可能性は考えられる。

表2 日本庭園の変遷

飛鳥時代以前	石・水・樹木への信仰 磐座・磐境 神池・神島	樹木や石や水に神が宿ると信じ、樹木の周囲は玉垣などでかこみ、そこを神聖な場所とした。最初は自然石そのものを崇拜していたが、石を立てて人工的に磐座・磐境を造り、そこに神が宿るとした。後の庭園の石組みのルーツの一つではないかといわれる。 農作物を育て、汚れを清める水に対しても特別な思いを抱く。神が宿る神聖な場所に池を掘り、池の中に島を造り、その島に石を立て、祖先の霊を祀る。これが神池・神島。やがて日本庭園の池泉と中島になったと考えられる。
飛鳥・奈良時代 (592-710-794年頃)	庭園文化と神仙思想の渡来 舟遊式庭園の誕生	複雑な形の池泉に中島が一つ配置。庭が祭祀の場から遊宴を目的とした場へと変化。 池泉に舟を浮かべ、音楽や舞踊を楽しむ舟遊式庭園や曲がりくねった曲水庭園の誕生。 ※神仙思想: 中国の燕斉の海岸地方に生まれた民間信仰で渤海中に蓬莱、方丈、瀛州の三神仙島があり仙人が住み、不死の薬があると信じられていた。
平安時代 (794-1185年頃)	寝殿造りの誕生 浄土式庭園・曲水の流行	池泉舟遊式、曲水、遣水の様式。遊宴の施設。 寝殿造りの建築と一対。庭園の規模が飛躍的に広大になる。 「作庭記」編纂。 浄土信仰が盛んになり、浄土式庭園の誕生。寝殿の位置に阿弥陀堂、対屋の位置に五大堂や薬師堂、釣殿に鐘楼や経楼を建て、池泉は黄金池に、中島は極楽浄土の舞台と見立てるようになり、浄土に渡る反橋が架けられた。
鎌倉時代 (1185-1333年頃)	書院造りの発展 回遊式庭園の流行	貴族支配から武士の支配する社会へ。 寝殿づくりから今日の和風建築の基礎となる書院造りへ。 舟遊式庭園から回遊式庭園へ。武士は庭園内を回遊しながら思索することを好んだ。 禅の庭の発生。枯山水の新しい滝石組「龍門瀑」の出現。
室町時代 (1336-1573年頃)	禅宗の隆盛 枯山水庭園の発展	禅の思想の影響を受けた庭が多く造られる。 室町時代中期、水の全くない枯山水式庭園誕生。
桃山時代 (1573-1603年頃)	神仙思想のリバイバル 茶の湯と露地の発展	巨石を多用したスケールある豪華な庭園意匠。神仙思想にもとづく鶴亀蓬莱の様式が最も華麗に力強く表現された時代。 一方で侘び、寂び、幽玄の庭である茶庭(露地)の誕生。 町屋の発生に伴い、坪庭が作られるようになる。
江戸時代 (1603-1867年頃)	庭園文化の総合化 大名庭園 離宮の造営	戦乱のない平和な世を迎え、広大な大名庭園が競って作られるようになる。広大な池泉庭には、鑑賞を退屈させないための様々な演出が施される。 茶室や茶庭、各時代の庭園様式を複合、集大成させた、いわば総合庭園とでもよぶべきもの。 江戸時代中期「築山庭造傳」など各種の作庭マニュアルが出版。造園ブームは全国各地へと広がる。
明治・大正・昭和時代 (1868年以降)	文明開化の庭園造り 借景式庭園の流行	諸大名に変わり、新しい時代の指導者となる明治の元勳や各地の新興地主、実業家が庭園の施主に。 借景式庭園が多く造られる。



図2 昭和初期の斐川平野 (庭園1宅所蔵)

しかし、斐川平野で枯山水が誕生した最大の理由は、日本庭園史上の枯山水発展の理由とは異なり、「水」に対する地域の人たちの考え方であったと私は考える。庭園1のお宅で、興味深い絵を拝見した(図2)。ご主人が子供の頃の斐川平野の風景だそうである。湿地である。斐伊川の度重なる氾濫で出来た肥沃な土地、斐川平野。水をいかに制御するか、常に悩まされてきたと考えられる。そのため、水はうんざりで、庭にわざわざ池泉を設けたという考えもなかったと思われる。石が高く据えられたのも、雪のためではなく、湿気からであったからかもしれない。苔や芝でなく、砂を敷いたのも水を排除するために最も好ましい手法であったからかもしれない。後に、出雲地方山間部や都市部(城下)で、敷地の問題や経済的な理由、管理の手軽さから、またそのデザイン性が評価されて、これらの手法が広まっていったと考えることはできないだろうか。

日本庭園史上、「茶庭(露地)」が誕生したのは、桃山時代のことである。露地は、茶室まで歩む心を清めるための通路として造られた。日本庭園史上、茶庭(露地)の誕生の影響も大きく、庭に飛石、手水鉢、燈籠など景物が誕生するきっかけとなった。

- 露地(路地)は、茶室まで歩む「道すがら」という意味。
- 庭の中を歩くことに意義があり、その歩くための実用として生まれたのが飛石。
- さらに、清潔を旨とするところから、口や手をゆすぐための手水鉢が導入。
- また、夜や暁の茶会のための灯りの必要性が生まれ、燈籠が持ち込まれた。

飛び石、手水鉢、燈籠が必ず配置される出雲流庭園。特に飛び石は庭の中で最も主張している要素である。これは、まさしく、茶道、茶庭(露地)の影響を受けていることを物語っている。

#### 4. おわりに

今年度の視察を通じ、風が強く、水害の多い斐川平野を中心に、築地松の防風林、書院造の和風建築とともに誕生したと考えられる出雲流庭園は、この地域を中心に今もなお造り続けられていることがわかった。日本庭園の奥深さに触れることで、出雲地方で独自の庭園様式が発達し、今も継承されていることは、とても貴重なことであると再認識できた。現在の日本庭園に大きな影響を与えた「枯山水」「露地」を庭に取り込み、独自の庭を創造した出雲の庭師の英才には感嘆するところである。

今年度の庭園研究部会の視察には述べ30人以上が参加した。これは、庭園に興味がある人が多いということを感じていると思う。また、個人の庭園を中心に視察をさせてもらったが、どこの訪問先も快く、そしてうれしそうに庭園を拝見させてくれた。庭を見たい人と庭を見せたい人をうまく繋ぐ手立てが考えられればいいのではないかと感じた。

#### 参考文献

『出雲流庭園「歴史と造形」』(小口庭園 グリーンエクステリア)  
平成23年度研究報告 (島根県技術士会)  
よくわかる日本庭園の見方(JTB)